

平成十六年三月

蟹江町歴史民俗資料館

# 年報

第二十四冊

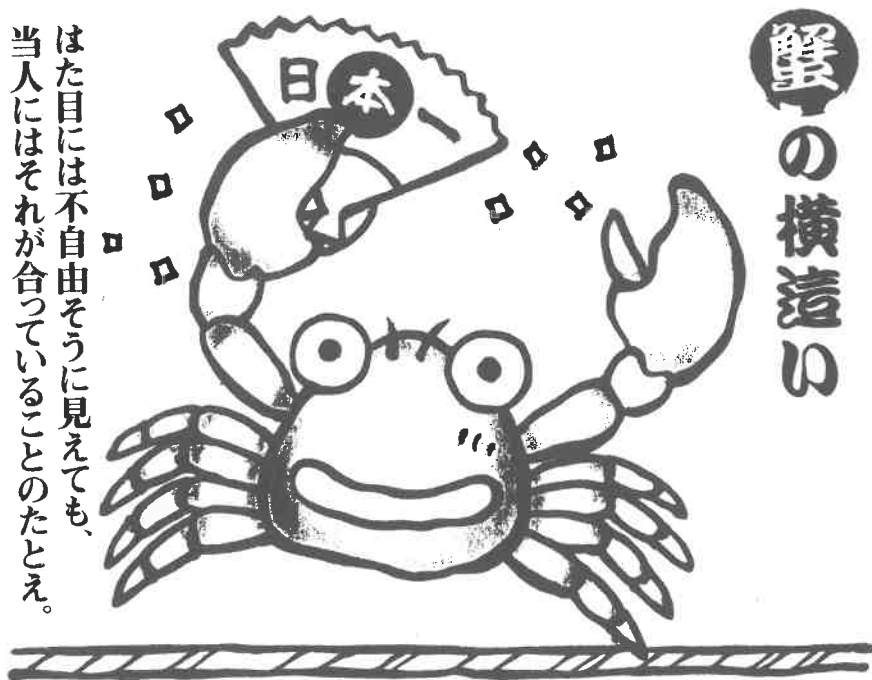
# 目次

一 「沿革誌」より	1
二 事業概要	2
三 資料の収集・保管	3
四 展 示	11
五 調査・研究	15
六 情報提供	17
七 教育普及	18
八 庶務報告	30
九 文化財保護	32

蟹江町歴史民俗資料館特別展

# 来て！見て！！ かに力ニ2002

はた目には不自由そうに見えても、  
当人にはそれが合っていることのとたとえ。



期間：平成14年10月26日（土）～11月24日（日）

午前9時～午後5時

月曜・祝日休館

場所：蟹江町歴史民俗資料館 企画展示室

蟹江町大字今字蟹江浦23番地（産業文化会館内）

主催：蟹江町生涯学習課

## 特別展開催にあたり

平成11年度に開催した「カニ展」の際に述べましたが、蟹江町史を編纂している昭和40年代に「蟹江」という地名の由来について、その昔、川の河口部にあたる葭山など湿地に多くの「カニ」が生息していたことにちなんで名付けられたことによると説明したならば、町民の方々は誰も疑問を持たなかったと思いません。

その理由は、当時の蟹江川周辺には『ジョウジョウマッカ』と親しまれた「アカテガニ・ベンケイガニ」がいたるところに生息し、夏などに子供たちが川遊びをする頃、カニと戯れた記憶を誰もが持っていたからで、それはある意味では当然のことだったかもしれません。

昭和34（1959）年の伊勢湾台風後、海拔0メートル地帯で高潮、洪水から先祖が築いた財産を守るために、名古屋防潮堤防が築かれることになりました。これはいわゆる「潮止め」で、今まで蟹江川に入っていた海水が再び入ることを防ぐというものであり、淡水と海水が交わる「汽水域」が消滅するというでもありました。

その後、蟹江川は淡水となり、汽水域に生息していた蟹江名産のヤマト蛸、鱧とともに、アカテガニ・ベンケイガニも姿を消していきました。「カニなきカニエ」という主人公不在状態のなかの今日では、蟹江の地名の由来について、昔にカニと戯れた体験のある人以外は、きっと疑問をもたれるのではないのでしょうか。

平成となり歴史民俗資料館では、蟹江町内の地名の由来について各地区に「字名の歴史由来看板」を設置してまいりました。各関連資料を紐解くとその中で人名と同じく地名にも、定かではありませんが何らかの由来のもとにあるものが存在すると推測されるということが解りました。

今回当館では、「蟹江」の由来のもとになる「カニ」について、前回とは趣を少し変え、「カニ」と人々との関わりを中心とした「民芸資料」や「まち中でのカニ」などの関連資料を中心に収集し、展示することにより皆様に地名などが親しみのある存在であることを理解していただくため、特別展示を企画いたしました。

特別展をとおして、「カニ」と「蟹江」について一層の愛着を持っていただきましたなら幸いに存じます。

なお、関係各位には今回特別展開催にあたり、当館の開催趣旨をご理解いただき、多大なるご尽力、ご協力を賜りました。ここに厚く御礼申し上げます。

平成14年10月 吉日

蟹江町歴史民俗資料館

## 1 蟹の生態について

カニは分類学上では昆虫などと同じ節足動物の仲間に含まれます。節足動物は、昆虫、蜘蛛など陸上に生息するものを含めると約100万種以上いるといわれています。

カニが属する節足動物の甲殻類は、約4万種もいる大きなグループで、ミジンコのような目に見えない小さなプランクトンから脚を広げると3メートル以上になるタカアシガニ（日本伊豆地方に生息）など様々な生物が含まれます。

甲殻類で代表的なものに、カニ、エビ、ヤドカリがあげられますが、カニ類は世界中で約5000種が知られており、その内日本には約800から1000種が生息しています。

私たちの身近なカニとして、サワガニ、モクズガニ、アカテガニ、ワタリガニ、ズワイガニなどがあげられますが、一見カニの形によく似たタラバガニ、花咲ガニなどは“カニではないカニ”で、種別的にはヤドカリの仲間とされています。

昭和34（1959）年の伊勢湾台風以前、蟹江川など河口の湿地、土手に巢穴をつくる蟹の仲間ベンケイガニやアカテガニが多く生息していました。赤いカニということで「ショウジョウマッカ」と親しまれていましたが、海水及び汽水域でしか繁殖できないということから、名古屋防潮堤が建設され海水が遮断されるようになった昭和30年代後半には、蟹江町内では見られなくなり、現在当町で確認できるのは、産卵期に海に下る淡水系のモクズガニのみとされています。

## 2 蟹の地名について

カニが地名に付けられている所は、今回の調査によると全国に約50ヶ所程度あることが判明しました。（これはあくまでも日本地図及び郵便番号帳などによって確認できた箇所であり、これに記載されていないものは除きます）

北は北海道根室沖のカニ岩から熊本県人吉市までその分布の範囲は広範です。特に関東から東海、近畿地方にかけて多くの「カニ地名」が存在しています。そしていずれもカニは水に関係があるようです。すべてカニ地名は渓谷の沢、大きな川の付近、河口部、沿岸部に隣接していることが解りました。

ただし、それぞれの地名にちなむカニの種類は異なるようです。

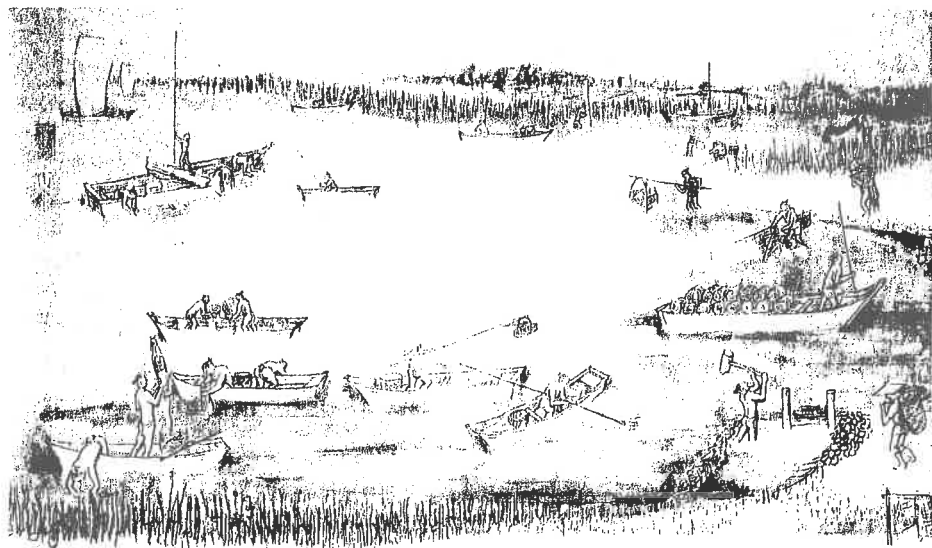
この中で、自治体としてカニ地名が付くのは、蟹江町の他、青森県津軽郡にある蟹田町があるだけです。

やはり蟹田町も海に隣接し、町の中央部を蟹田川が流れるという地形でケガニ・イガクリカニが多く生息するということから、蟹田という地名になったというようです。

（当館作成 日本全国“蟹”マップから）

蟹江町歴史民俗資料館特別展示

# 「蟹江の漁業」



平成15年1月25日(土)～2月23日(日)  
(月曜、祝日、2月2日(日)休館) AM9:00～PM5:00

場 所 蟹江町大字今蟹江浦 23-4  
蟹江町産業文化会館 1階 企画展示室

主 催 蟹江町生涯学習課

# 開催にあたって

漁業が盛んだった蟹江。かつて蟹江川河口には港があり、港があった舟入地区は江戸時代以降“漁業のまち”として栄えました。幾筋もの川が流れ、また、蟹江川、日光川、善太川などの川が集中して伊勢湾に流れ込むという自然の恵みをうけ、蟹江港周辺は水産物の宝庫であり格好の漁場でした。

明治36年(1903)には蟹江町漁業組合がつくられ昭和19年(1944)蟹江町漁業会に改称、その後昭和24年(1949)には蟹江漁業協同組合ができ、漁業者は200人以上、そして漁獲高では海部郡で第一位を誇った蟹江の漁業は発展を続けました。しかし、高度経済成長という時代背景のなか、工場建設による水質汚染の被害や干拓政策などで境をしいられるようになりました。さらに昭和34年伊勢湾台風来襲時に大被害を受けたのをきっかけに防災対策として名古屋港の南に高潮防波堤を築く計画がもちあがり、これによってついに蟹江漁民は漁場を失い、漁業組合は昭和39年解散するに至りました。そして現在、蟹江で漁業を生業とするのはただ1人となってしまったのです。

蟹江町漁業組合が発足してちょうど100年、そして蟹江漁業協同組合が解散して40年が過ぎようとしている今、人々の記憶の中からも、まちの風景からも、蟹江が漁業の盛んであったことが薄れつつあるなか、改めて蟹江の漁業の歴史を振り返り今回の特別展「蟹江の漁業」を開催したいと思います。

なお、今回の特別展開催に際して、現在蟹江町でただ一人漁業を営んでいらっしゃる佐藤優様、多数の漁具を提供していただいた伊藤博徳様、写真を提供していただいた加藤俊男様を始めとした多くの関係各位にご協力をいただきました。ここに厚く感謝申し上げます。

平成15年1月吉日

蟹江町歴史民俗資料館

# 蟹江の漁業の歴史

## 1 蟹江の漁業のはじまりから発展期まで

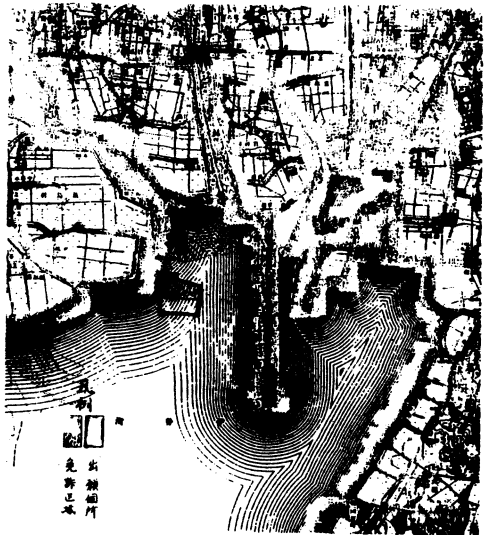
海拔0メートル地帯である蟹江町は、かつては大半が海であった。海に囲まれたこの地に住んでいた人々が漁をして生活していたことは想像に難くはないであろう。古くは須成にあった蟹江港は、蟹江城が築かれた戦国時代には蟹江本町海門付近へ移り、そして新田開発で福田新田が寛永17年(1640)に干拓されると港はさらに南下し、現在の舟入地区に移った。それに伴って漁民たちも南へと移動し舟入は漁業の中心地となった。

「寛文村々覚書」(1673)には蟹江本町村、蟹江新町村、須成村、「郡村徇行記」(1822)には蟹江本町村、蟹江新町村、今村、須成村で漁を営む者があったことが記されている。「郡村徇行記」には「舟入ニテ八鰯 蛤蛸ヲ第一ニ採漁師生産トス、…」とあり当時からウナギ、蛤、蛸、イナ(当世もののボラ)などがよく捕れた。特にうなぎが特産物で遠くは京都や信州まで出荷され、ウナギの稚魚であるシラスは浜松に出荷されたという。また、元禄時代から「生州」天然養魚も行われていた。

明治になるとさらに舟入を中心とした蟹江の漁業は発展し、約300戸が漁業を営んでいたという。多くは半農半漁の生活の家だったが、100戸程度の専業漁業者があったようである。明治34年に「漁業法」が制定されたことにより、明治36年には蟹江町漁業組合が発足、昭和18年に水産業団体法が制定され、翌19年蟹江町漁業会に改称、その後昭和24年水産漁業組合法施行にともない漁業界は解散し、蟹江漁業協同組合に改組された。漁業戸数は明治の頃に比べると減少傾向にあったが、漁場の拡大や漁船の改良、海苔養殖を手がけるなど蟹江の漁業は発展を続け、漁獲高では海部郡で一位を誇っていた。



天保12年(1841)蟹江本町村絵図  
蟹江川に漁船や漁網が描かれている。



昭和16年出願漁場個所新旧連絡図  
それまでの約倍の漁場を申請し、その後認められた

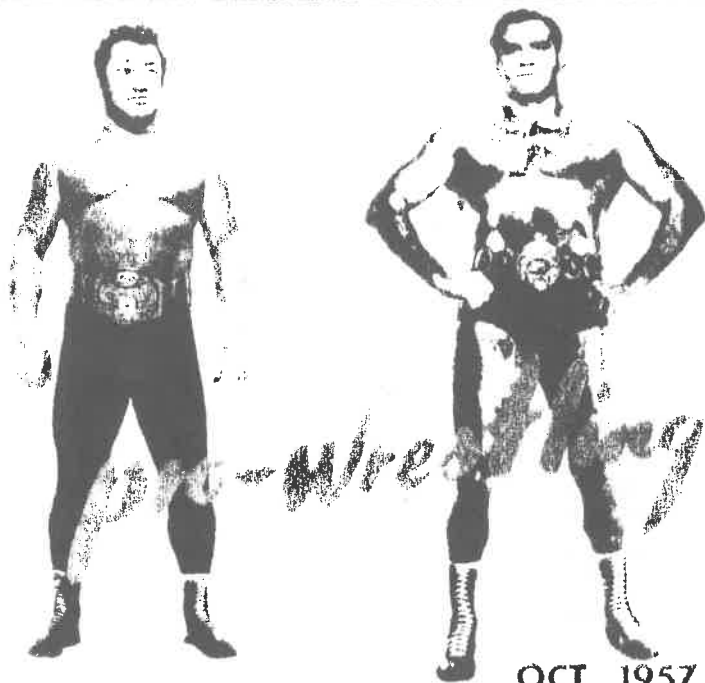


蟹江町歴史民俗資料館企画展

祝日本のプロレス50周年記念

# プロレス博物館展

世界選手権大会記念



OCT. 1957

ルー・テーズVS力道山 日本初NWA世界戦のパンフレット(昭和32年)

期間 平成14年5月11日(土)～6月9日(日) 月曜休館日

場所 蟹江町歴史民俗資料館 企画展示室  
愛知県海部郡蟹江町大字今字蟹江浦23-4

電話：(05679)5-3812

主催 蟹江町教育委員会 生涯学習課

資料提供 蟹江敦氏

## ご あ い さ つ

祝日本のプロレス50周年記念「プロレス博物館展」にご来館下さいまして、誠にありがとうございます。

この度、蟹江町歴史民俗資料館様にご協力をいただくことができて、プロレスの展示会を開催させていただけることになりました。

私は、愛知県東海市在住の蟹江敦（35才）と申します。現在は、札幌かに本家名古屋駅前店に勤務しております、プロレスのファン歴は、20年近くになります。

特に栄光の輝きであるプロレスのチャンピオンベルトの魅力にひかれまして、これまで私なりに地道な活動を続けて参りましたが、本展では、下記の3点につきまして展示をさせていただきたいと思っております。

### ①力道山の時代

②プロレス界の最高権威を誇ったNWAの歴史—NWA世界王座への登竜門と言われた、ミズーリ州ヘビー級王座の時代を中心として—

③表現豊かなメキシコのプロレス「ルチャ・リブレ」

日本のプロレス50周年の歴史は、アメリカやメキシコなどのプロレスと密接な係わりをもち、今日に至ってもその関係は続いております。

現在多くの格闘技が盛んに行われていますが、「やっぱり歴史のあるプロレスが最高である」が私の信条ですが、本展をご覧いただきましてプロレスのもつ魅力を少しでも感じていただけましたなら幸いです。

最後になりましたが、趣旨をご理解くださいまして、展示場のご提供と準備にご協力いただきました蟹江町歴史民俗資料館の皆様方に心より感謝し、お礼を申し上げます。

将来の夢は、長い歴史を誇るプロレスの博物館が実現されることを希望しております。そして本展も、その一つのきっかけになればと思っております。

平成14年5月吉日

蟹 江 敦

# 1. 力道山の時代

日本プロレス界の父、力道山。本展の祝日本のプロレス50周年記念とは、力道山が相撲の世界「角界」を離れ（昭和25年9月）、プロレスの道へ身を投じデビューを果たした、1951（昭和26）年10月より教えてのことであります。

私より先輩の方々で、プロレスにあまり関心のない方でも、力道山やシャープ兄弟、フレッド・ブラッシーの名前は、どなたでもご存知と思います。日本のプロレスの礎を築いた力道山は敗戦に打ちひしがれて夢をなくして沈んでいた日本人の心を、闘いを通じて勇気づかせ、夢を与えてくれた英雄でした。

当時はまだ敗戦の駐留軍下にあつて抑圧されていた。体格的にもコンプレックスのある大きな外国人レスラー連を、力道山は空手チョップでなぎ倒してくれたのです。

そしてプロレスは大ブームとなり、力道山は大スターとなりテレビの普及にも貢献し、テレビの広がりとともに発展して行ったのです。

力道山が今考えても、スケールが大きくやはりすごい人だったと思える主な点を挙げてみますと、

①力道山の逆三角形の上半身。現在の鍛え上げたレスラーでも、力道山程の上半身の持ち主はいない。

②ものすごいリーダーシップと、空手チョップを生んだごつい手。

③力道山は、直筆のサインはあまり残さなかった。衣類などもほとんど残っておらず、希少性が力道山の価値を一段と高めている。

④1953（昭和28）年に、日本プロレスリング協会と道場を発足。プロレスの体制づくりをまず着手し、基盤をつくってから興行を行った。

⑤昭和29年日本初の国際試合の時、世界タッグチャンピオンのシャープ兄弟の他、柔道出身の木村政彦、山口利夫らも参加させテレビ放映とともに、いっきにプロレスブームをつくった。

⑥1957（昭和32）年10月に世界チャンピオン、ルー・テーズを初来日させ、日本及びアジア初のNWA世界ヘビー級選手権試合を実現させた。これは大快挙で、東京（後楽園球場）と大阪での2試合ともドローで、力道山の王座奪取はならなかった。後楽園球場での試合は、2万7000人の大観衆を動員し、日本テレビの実況中継番組の視聴率は87パーセントを記録した。（電通調べ）

⑦20世紀最大のレスラーと言われる鉄人ルー・テーズより、日本プロレス界の至宝と言われたNWA認定インターナショナルヘビー級王座を奪取し、日本に定着させ、現在も使用されているタイトルを日本に残した。（現在も三冠統一ヘビー級王座の内の1本として残っている。）

⑧昔から今日に至るまでの様々なリーグ戦のルーツとなる、昭和34年よりの第1回ワールド・リーグ戦の開催。

⑨昭和36年7月30日、東京渋谷にプロレスの殿堂リキ・スポーツパレスを完成。

プロレスの常設会場やトレーニング施設。ピリヤード、ボウリング場、レストランなどを一つの建物の中に収めた大衆娯楽場で、地上9階、地下1階の壮大な施設を完